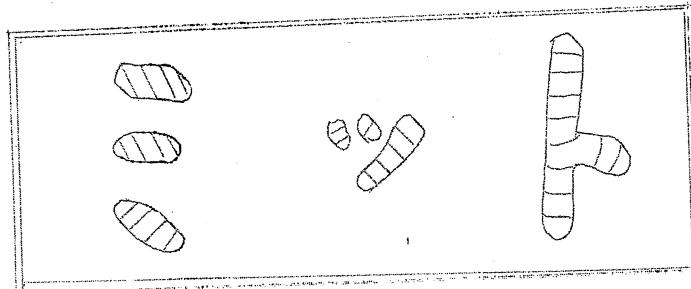


國家権力の弾圧計画を
粉碎しよう。

更生に向け早い返こう



’73.2.25発行

カ1号



はじめに

寒い季節ですが獄中の同志諸君お元気ですか？ ようやく絶対ニュース「ミット」1号を発行することになりました。まだ絶対といつても生まれたばかりで方向性さえ犯めていません。だが権力の連合赤軍反動キヤンペーンのカゲにかくれて、自分達は関係ないんだという顔をして、武力斗争の意叉やそれをヨッた人達を葬り去ろうという動き、清算主叉が大手を振って歩いている中で、最もよく争ったのが故に、最もその敗北をかみしめている連赤や我々こそ、武装斗争を主体的に総括できるし、しなければならないのだと思ひます。これはRG71年秋期武装斗争をヨッた被告達の共通の総括の場であり、獄内と獄外を結びつける系であり、又、権力の弾圧計画をほねのけるバネとしていたいと思ひます。mitは英語のwithをちょっと気取ってドイツ語でいったのですし、飛んでくるボールをうけとめるものもあるのでこんな名前にしました。

市川兄の初公判開かる！

去る2月6日午後1時15分から東京地裁504法廷で市川君の初公判（爆取1条）が開かれた。人定實田、起訴状朗読、求釈明、釈明が行なわれ、その後40分余り意見陳述を置かれた。横田弁護士から、「10月18日逮捕されてから今もなおKC厅に留置されたままになつてゐり、読書時間の制限等公判準備にもさしつかえるので早く移監して欲しい」と抗議があつた。市川兄は11月8日起訴され、11月14日再び接見禁止、12月27日接見解除の準抗告を棄却、今年の1月12日にようやく接見が解除になったのです。接見解除になるとからも連日1時頃近く待たされるというひどい妨害が続いた。（なお市川君は2月14日東京拘置所に移監されました。）

斎藤兄、完黙で勝利！

1月9日、京都拘置所に拘置中の斎藤兄が21年比谷爆弾事件（11.19）の容疑でテッヂ上げ逮捕された。これに因連して1月12日、東拘の尾崎兄・獄外の友人宅に強制捜索があり、尾崎氏には令状も見せず、他の空房にとじこめられ、手紙13通を押収した。斎藤兄の黙認を貫徹し、処分保留で2月9日京都拘置所に移監されました。

（獄中3被告より市川兄へ連署の手紙）

前略、下記の通り、斎藤氏より竹谷君聖由で回覧が廻ってきたのでお知らせします。

前略、用件のみで失礼します。
市川平同志が未だ権力の追求の中にあって苦心しておられる事は御存知の事と思ひます。ついでに我々が彼を励まし連帯の意の内に向える努力を行ないたいと思うのです。が、彼は未だ接見禁止が解けず、手紙の往復も面会も出来ない状態にあります。ですが、彼の手に直ちに渡らなくとも、接見禁止が解けた時まで我々のこの意志が彼に伝わる様に今から連名の手紙を出したいと思ひます。余り長い文章も大して必要はないと思ひます。賛同下さる方は（勿論賛同願いたい）署名して次へ廻送して下さい。

竹谷氏→尾崎氏→○○姉→市川兄

ではよろしく！

飛べ！ フェニックス！

甦れ！ スバルタカス！

我々一同待つている

斎藤哲夫（京拘）

竹谷俊一（東拘）

尾崎 力（々）

獄中からの手紙

前略、只今(13日午後3時すぎ)、貴婦からの手紙を受取りました。自分は貴婦のお言葉に拘らず未だ战士としては落第です。過去にあっては一战士としてヨツテ来ましたが小生の間の誤りは余りにも大きい。他のいかなる諸兄弟がこの小生を許そうとも、小生は自分が許せないでいる。自分で何をしたのか、どういう意味のことなのか知つていいる限り、この責任から逃れることは出来ないし、逃れたくあります。貴婦がこの小生を励ます意味で“最良の战士”と云つて下さった方に感謝します。が、もう一度考えて下さい。この大きな誤りを犯した小生が“最良の战士”だとすれば、我々の組織はどうんなに堕落したくだらない組織なのかということにならぬではありますか。小生は断じていいます。小生は“最も優秀な战士”だつたと。が今まで一度小生は市兄と景姉に“最も優秀な战士”となることを誓います。そのゆ一歩を総括として次の新たなゆ一歩を踏み出すものでなければならぬ。

小生はこの申で半年余り毎日毎時毎分考え続けて来ましたし、考えています。何から考えるのか、何を考えるのかを“考える”のです。この申にあつては考えることの為に考えるといつた無限地獄の様な“総括”。の迷路に陥りそうです。そしてやっとのことであれを脱したのです。この申の虚しい考えの迷路に踏み込むではなく、与えられた任ムを一つ一つ消化すること、つまり行動すること、これです。総括が單なる忠介的なものではなく、実に行動的なものであるということを知らないわけではなかったのですが、この間の小生の堕落は、この二とすら忘れていたのです。

今、小生は全ての同志兄弟から、「健康であること」「斗う能力を失わないこと」そして「ヨウ意志を鍛えること」の任ムを受けています。これがゆ一の小生の総括であり、唯一の二の中での、否、貴婦も含めて我々の任ムなのではなかいか。貴婦が今、权力と小生によつて、どういう立場に立たされているのかは理解できます。その責任の大きな部分が小生にあり、その小生がこんな事をいうのは全く自分の立場を忘れたものと言えるかも知れませんが、自分は貴婦と共に尾崎氏、市兄を含め共に頑張って行きたいと思つります。

① 69年4月28以降の赤軍派は革命の軍事を提出し、それを「人民の軍隊」として実現しようとしました。「赤軍兵士公募」はその「人民軍志向」の現われかと思ひます。我々はそれに「党の軍隊」としてRGの組織化を実現しました。

② 以後の赤軍派の敗北の真因は「根拠地論」もそうではあるが、この「人民志向」による無制限の無政府主義の流入を訴じること、これにどう思ふ。我々の組織の総括は全く逆に、官僚制の流入を許したことと考えます。なぜなら各委員会が全く機能せず、單一の機関への吸収があった。結果、進行していった党内論争を充分に処理出来る能力を失つてゐた。

③ 昨秋の我々のヨイは、我々の誕生から課題としてある「革命の軍事」とは全く異った形でしか行ない得ながらった。この斗争が全体として持つ位置は正しく認証していたにも拘らず、分派によって形が変らざるを得なかつた。我々は革命の軍事を戦争の問題としながらも、(革命戦争の問題と)それを組織の問題として考へることで出来なかつた。いや組織の戦争能力の問題とこそ抱えていたにも拘らず、分裂によって個人的能力へと転換せざるを得なかつたのです。赤軍派も當時同じことが言えたのではないか。何故なら次のことがそのことを証明している。

④ 連赤事件はこの我々共通の問題(別々に出発しながらも同一の、しかも同質の問題に)がかかるものかを示す。革命の軍事と組織の戦争能力として把握し、それを獲得するための党内斗争に於て我々の弱点をバク口したのだ。彼らも我々も共に“個人的能力”によつてじか組織的能力を計ることが出来なかつたのです。その結果、官僚的指導と無政府主義の斗争としての連赤事件があり、我々には右派、中間派との斗争によって自らを浄化しつつも、同時に組織としての能力を欠除させるに至った。

⑤ 我々の獲得したものは何であったのかは、実にこの総括であり連赤事件以降、全左翼内部に起つてゐる右傾にも拘らず、革命的諸派によるこの革命的軍事の戦争能力の獲得と、共通の課題に対する共同の処理の可能性一つまり組織統一の可能性を我々の斗争とあの連赤事件によつて獲得したのである。我々はこれで十分ではないか。

大体この様に思つています。もっと詳しくかけば良いのですが、これが限界だと思います。

また、お手紙を下さい。小生もまた書きたいと思ひます。では連帶の握手を。

1972.12.14, 齋藤哲夫

ミット編集局より一同志、友人からの手紙、文章をのせていただきたいと思ひます。送つて下さい。お待ちしています。